全国造形教育連盟　日本教育美術連盟　共同開催

全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道

記念集録

研究主題

“わたし”を創る

～自立と共生の造形教育をめざして～

授業実践テーマ「あったかい！」をつなげ合う造形活動

第６４回全国造形教育研究大会
第６２回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会
第６１回全道造形教育研究大会　札幌大会

2011.7.26～7.28

第64回全国造形教育大会
第62回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会
第61回全道造形教育研究大会　札幌大会

全国造形教育連盟　日本教育美術連盟　共同開催

全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道

＝研究主題＝

“わたし”を創る　～自立と共生の造形教育をめざして～

授業実践テーマ
「あったかい！」をつなげ合う造形活動

会期　2011.7.26～7.28
会場　札幌市立幌西小学校　札幌市立円山小学校
　　札幌市民ホール　ホテルライフォート札幌

＝主催＝
全国造形教育連盟　日本教育美術連盟
北海道造形教育連盟　札幌市造形教育連盟

＝後援＝
文部科学省　北海道教育委員会
札幌市教育委員会　全国連合小学校長会
全日本中学校長会　全国高等学校長会
全国公立学校教頭会　全国特別支援学校長会
日本PTA全国協議会　全国国立幼稚園長会
北海道国公立幼稚園長会　北海道私立幼稚園長会
北海道小学校長会　北海道中学校長会
北海道高等学校長協会　札幌市立幼稚園長会
札幌市私立幼稚園連合会
札幌市小学校長会　札幌市中学校長会
札幌市立高等学校長会

＝協力＝
武蔵野美術大学　北海道教育大学
財団法人札幌市芸術文化財団
札幌芸術の森　本郷新記念札幌彫刻美術館
公益財団法人パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会

CONTENTS

HOKKAIDO 2011

3 あいさつ

菅原清貴（大会長　北海道造形教育連盟会長）

塚野昭臣（大会実行委員長　札幌市造形教育連盟会長）

4 祝辞

永関和雄（全国造形教育連盟委員長）

松山明（日本教育美術連盟副理事長）

5 大会宣言

6 授業・提言一覧表

8 大会風景

12 大会を通して

12 “わたし”を創る
～自立と共生の造形教育をめざして～

13 「あったかい！」をつなげ合う造形活動

15 扉としての成果・課題

18 授業報告

58 提言分科会のまとめ

68 扉分科会

70 授業プレゼンテーション・全員シンポジウム・全体講評

76 各種会議報告

88 子どもアート展2011

90 声・こえ・KOE

あとがきにかえて

集録の発刊によせて
感謝：「全国図画工作・美術教育全国大会 in 北海道」を終えて

大会長
北海道造形教育連盟会長
菅 原 清 貴

「全国図画工作・美術教育全国大会 in 北海道」が終了し４ヶ月が経ちました。ご参加くださった皆様に深く感謝申し上げます。北海道造形教育連盟は、昭和26年に北海道図画工作連盟として設立されました。昨年は60周年の記念年として記念誌発行やプレ全国大会及び式典を開催しました。全国大会は、還暦を迎えた本連盟の総力をあげての取組となりました。

おかげさまで全国から945名の参加をいただき大盛会のうちに終了することができました。今大会は、戦後３回目となる全国造形教育連盟と日本教育美術連盟が共同で開催する大会となりました。第１日目は、校種別の研修さらには共同開催会議その後の「懇親の集い」が行われました。２日目は、幌西小と円山小を会場に幼児から大学生まで参加しての授業公開が行われました。授業者を中心に多くの造形の仲間が、子どもたちのしあわせに繋がる「あったかな」授業を実現させようと尽力くださいました。また、充実した実践に基づく研究発表も全国からいただきました。それら公開授業や研究発表に対し、我が国の造形教育を代表する40名を越える助言団の皆様に、ご示唆をいただきました。その夜開催されたレセプションは、360名という参加者で、会場は熱気に包まれました。最終日の全体会は、市民ホールで「全員フォーラム」を開催しました。新旧４名の調査官に「これからの造形教育」の在り方を指し示していただきました。同時開催された、「子どもアート展」は、市民にも鑑賞いただき充実した展覧会となりました。

この大会をさらに価値あるものにしてくれたのは、「実践事例集：造形新時代ひらく」の発刊でした。この事例集は、全道の幼稚園から中学校までの授業の実際、美術館との連携や音楽祭とのコラボレーション、そして地区サークルの活動の紹介など大会実行委員会広報部が尽力しまとめ上げたものです。日本教育新聞にも紹介され、大会の終了後も全国から購入希望が多く寄せられました。

様々な困難を乗り越えて実現したこの大会は、今後の造形教育の未来を指し示すものとなったと自負しています。

しなやかで繊細な感覚を持つ日本人の感性を未来につなげていくために、造形教育で培う資質や能力の大切さを全国の先生と確認できた大会でした。この素晴らしさのすべてをまとめ上げた集録を次の大会への宝として前進していきましょう。

最後に、この大会をつくり支えていただいた全ての皆様に、心からの感謝を申し上げたいと思います。

北の大地から造形美術の発信

大会実行委員長
札幌市造形教育連盟会長
塚 野 昭 臣

研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」を掲げて取り組んだ今大会。

全国から多くの方々に参加いただき造形美術教育の大切さを改めて実感できる大会となりましことに感謝いたします。

札幌市造形教育連盟では、子どもたち一人一人の想いを大切にした造形美術活動を実践し、教師や活動を共にする仲間とともに、みんなが「あったかい」という心のあたたかさ、思いをつなげ合う造形美術活動に取り組んできました。

今大会では、「心の発動」「感動の共有」という２つの視点をもとに幼児から大学まで20の授業を公開させていただきました。どの授業会場も参会者の熱心かつあたたか眼差しのもと子どもたちの笑顔と真剣な造形美術活動の様子を見ることができました。またどの分科会でも、授業や提言をもとに、全国の先生方からご意見が出され、有意義な会とすることができました。

これからの造形美術教育では、「共通事項」にみられる育てる資質能力を明確にし、どのように育てるのか、また、生活の中の造形美術の働きや関わりを自覚させる活動や美術文化についての理解を深める指導などが求められています。

大会最終日の全体会では、授業を振り返りながらステージ上のご助言の先生方、授業者の先生方とフロアーの全国から参加された先生方とともに、改めて、これからの造形美術教育の充実と発展に向けての決意を新たにし、造形美術教育の重要性を発信することがてきました。

今年は、東日本大震災、また、大会直前に日本教育美術連盟の岩﨑由紀夫理事長が亡くなるという悲しみを乗り越えての大会でもありましたが、多くの成果をあげることができました。

最後になりましたが、本大会の開催にご尽力いただいた多くの団体、そして、多大なご指導、ご示唆をいただきました文部科学省のはじめとする関係機関の皆様に心から感謝申し上げます。

造形教育のエネルギーを感じる大会でした

全国造形教育連盟委員長
永　関　和　雄

「この大会に参加してよかったと感じている人はピンクを上げてください」これは、大会３日目、全体会場の市民ホールがピンク色に染まる直前のアナウンスです。表がピンク色で裏は白くなっている団扇が参加者全員に配られ、進行役の研究統括部長森實さんの問いかけに、YESのときはピンク、NOのときは白を見せ、それぞれが意思表示をしながら主体的に参加した全員シンポジウムは大変な盛り上がりを見せました。また、二つの会場に分かれて行われた20の授業公開と分科会の様子がステージの大画面でプレゼンされ、大会の全容が共通理解できるなど新たな工夫が各所に見られ、今回の北海道大会は一体感のある素晴らしい大会だったと思います。

全国造形教育連盟と日本教育美術連盟、北海道造形教育連盟、札幌市造形教育連盟の共同開催の形で実施されたこともあり、会場は全国からの参加者であふれんばかりの賑わいでした。授業公開や分科会のどの会場も熱心な参加者で盛り上がり、２日目のレセプションは大ホールに入りきれないほどの約400名が集い、造形教育への熱い思いを共有することができたと思います。

３月11日に発生した東日本大震災の大きな傷が東北の被災地はもとより日本全体に重くのしかかっている中で、その開催さえ危ぶまれた大会でした。苦しくとも力を合わせて復興するしかないことは分かっていても日本中が悲しみに包まれた中での開催準備には多くの困難があったことでしょう。大会の成功を支えた北海道の先生方のご尽力に心からお礼を申し上げます。

数年かけて練り上げた研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」は、今日のような非常時にあっても変わることのない大切な視点です。この大会で確認された造形美術教育の大切さや大会の成果を今後の教育活動につなげていきましょう。造形活動を通した共生の輪が学校から家庭、社会へと広がり、子どもたちの心を温かく豊かに育て、日本を復興させる力になると確信しています。北海道で高まった造形教育のエネルギーを全国に発信しましょう。

「全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道」大会を終えて －絆を深め美術教育の明日を切り開こう－

日本教育美術連盟副理事長
松　山　　明

研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」「あったかい！」をつなげ合う造形活動を授業実践テーマとして全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道が札幌市で開催され、多くの成果をおさめるとともに美術教育担当者のつながりを深め、盛会裏に終了されましたことを心からお慶び申しあげます。

北海道大会は菅原清貴大会会長を中心に北海道造形教育連盟、札幌市造形教育連盟が主体となり計画的に準備を進めてこられました。素晴らしい大会運営と細やかな気配りに心から敬意を表します。

また、北海道大会は３年振りに全国造形教育連盟と日本教育美術連盟が共同開催する大会となりました。参加された皆様には新学習指導要領のめざす教育課程の編成や図画工作・美術教育の充実に各地でご尽力いただいておりますが、今大会は美術教育で育成する学力とは何なのかを語り合い再考する大会となりました。これからは「美術の必要感」を自覚させ「生きて働く力になる美術教育」をめざして指導を改善していかなくてはなりません。

現在、美術教育には不確定な時代ですが、全国の美術教育関係者が各地域の実践を相互に情報交換できるネットワークづくりと共に、全国の地域を代表する理事や事務局の皆さんが中核となり、組織を活性化させることが必要です。そして、私たちが確かな指導計画と学習指導案をたて授業に臨むことが大切なのです。

全国の美術教育に関係する一人一人がそのことを自覚し、研究活動を活性化させ、活動の輪が強い絆となることを強く期待いたします。最後になりましたが、平成24年11月16日、17日には「輝け！・いのち・こころ・つながり!!」－つくりだす喜びをもとめて－を大会テーマとして大阪大会を開催いたします。全国美術教育関係者の皆様のご参加を心よりお願いいたしまして、ご挨拶といたします。

大会宣言

この度の東日本大震災において亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。また、被災地で生活している子どもの心に、造形教育の力で安らぎと希望を生み出すことができるよう、私たちも力を尽くしてまいります。造形活動は、子ども一人一人に夢や希望を生み出し、元気にする力があります。創造力を高め、新しい日本を創る力があると確信しています。また、未来を担う子どもが学ぼうとする姿は、被災された皆様の心の癒しや励ましに繋がるものと考えています。

我が国は高度経済成長を経て、めざましい発展を遂げてきました。しかし今日では、「学歴神話の変質」「雇用環境の変化」「子どもの虐待」「老人の孤立」などの大きな問題が生じてきています。

このような時代において、豊かな感性、創造性、個性などを大切にして、人間らしく生きることがますます重要になってきました。それはまた、主体性や自立性など人間としての資質や能力を重視する「生きる力」が一層必要な時代でもあると考えます。その中にあって私たちは、幼児期からの遊びや様々な体験を通して、美しいものや自然に感動する、生命を尊重するなど、「豊かな心」を育てる造形教育を一層大切にしなければなりません。

私たちは、戦後一貫して、子どもの人間形成にかかわる造形教育の振興を図り、時代が要請する教育課題に対応してきました。教育に携わる全ての人々は、人間形成としての造形教育を一層大切にしなければならないと考えています。

全国各地よりお集まりの方々と共に、この北海道の地で「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして」の主題のもと、豊かな感性を育み、子どもが自ら価値を創る「自立」と、友達のよさに共感できる「共生」の造形教育の重要性を全国に発信する研究大会として、下記の事項を宣言します。

記

1　これからの生涯学習社会に向け、常に学び続けようとする意欲をもち、豊かな感性と知性が調和した人間形成と社会における豊かな文化の育成（「自立」と「共生」）を目指す造形教育の一層の進化と充実を図ります。
2　造形教育を通して、子どもが心と体を働かせ、表現する喜びを十分に味わいながら、他者とかかわり、自分自身をつくりあげていく過程を支えます。
3　国際化の中で、地域や他の機関との連携を図り、広い視野から造形教育をとらえ直すとともにその意義を広く社会にアピールし、造形活動を愛する人づくりに邁進します。
4　保育所・幼稚園・認定こども園・小学校・中学校・高等学校・特別支援教育諸学校・短期大学・大学等、また美術館等との連携を密にし、時代が求める造形教育の指導や支援のあり方を明らかにして、その充実を図ります。
5　造形教育をさらに発展させるために、表現活動、図画工作科・美術科の必要とする授業時間と、教科の専門性に長けた教諭等の配置と育成が必要不可欠と考え、これらの確保と充実を強く要請していきます。

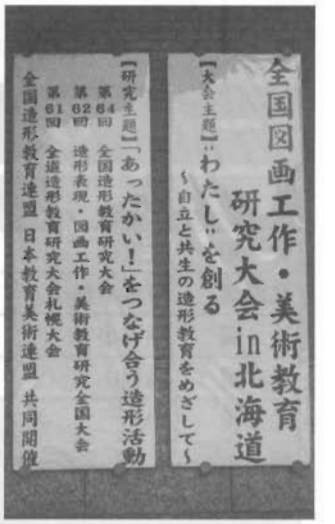
以上、５点にわたり宣言いたします。この宣言を具体的なものにするため、全国造形教育連盟・日本教育美術連盟は大会主題に基づいた研究を、子どもの豊かな育ちにつなげ、これからの造形教育を発展させることを目的とし、全力をあげて取り組んでいきます。

平成23年７月28日

全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道
第64回　全国造形教育研究大会
第62回　造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会
第61回　全道造形教育研究大会

※大会第一日目の共同開催の席で大会宣言起草委員（全造・日美各１名）からの提案に基づき審議し、いくつかの意見をいただき手直しの後、最終日に全体提案ののち正式に宣言を発する。

大会風景



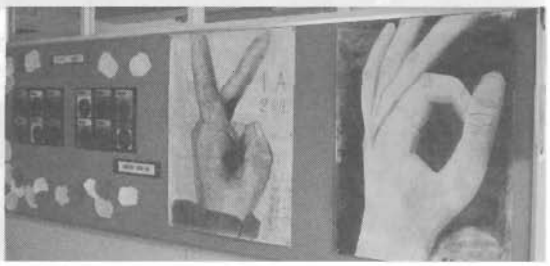
第1日目
ホテルライフォート

校種別部会

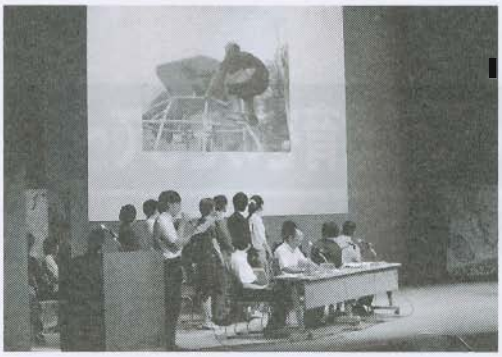
共同開催会議

共同開催懇親会

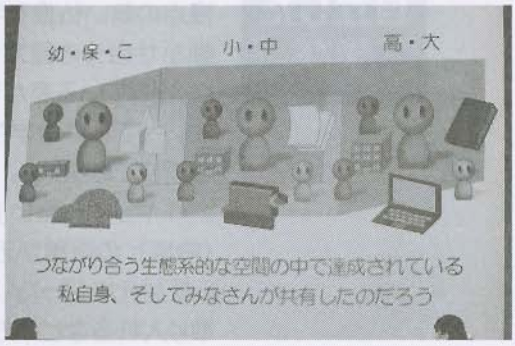
第2日目
幌西小学校



第2日目
円山小学校



第3日目
全体会・閉会式



大会宣言を発表する時任勝 全造連事務局長

大会の成功に感謝

「てぃーだ(太陽)の島で」

「大阪へどうぞ」

稲實順 大会事務局長

櫻田豊 大会事務局次長

田口和男 実行副委員長

小泉信嗣 実行副委員長

研究主題

“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～

北海道造形教育連盟　研究部長　湯浅　大吾

「全国図画工作・美術教育研究大会 in 北海道」は、全国から多くの造形教育に携わる皆さんをお迎えし、成功裡に終了することができました。

わたしたちは、今大会の研究主題として「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」を高々と掲げました。これは、大会宣言にも表現されているように、現代の社会情勢、そして造形教育を取り巻く今日的な状況を踏まえ、未来を創る子どもたちに**「生きる力」と「豊かな心」を育てる造形教育**を大切にしていかなければならないと信じる私たちの思いから生まれた主題です。

大会の意義は、本集録のさまざまな記事や原稿で明らかになっていると思います。研究主題“わたし”を創るがどのような活動場面や、子どもたちの様子、教師のかかわりの中に表れていたのか具体的な授業を通して振り返ってみます。

自立した学び

教師のまなざしの扉「みて観て発見！日本の美～仏像編」では、中学生にとってほとんど接点の無い仏像を学習の対象としていました。しかし、授業が始まると、子どもたちは感性を働かせ自分の見方や感じ方を通して、アートカードの中の仏像と自分との間に新しい意味をつくり出している姿が明らかに見て取れました。私たちのめざす**自立した造形活動の一つの姿**です。そこには中学生と仏像の距離を縮めるための教材化や授業の展開といった教師の手立てが講じてあります。

「やってみたい」という「**心の発動**」が子どもの中に起こるためには、**学習者と学習対象（内容）の距離**が近いことが必須条件と考えます。そのため、私たちは、子どもの生活の中から教材化を図ったり、今回のように学習対象との距離を縮めたりするスケッチやアートカードを取り入れるなどの方策に目を向けてきました。

学びの道程

さらに本研究大会を通して、学習対象との距離を縮める過程で子どもの中で何が起こっているのかということにも目を向けていく必要性を学ぶことができました。それはどのくらいの距離感から縮めていくのがよいのか、そして子どもの発達に伴い、どのように在るべきなのかなど、子どもと学びとの関係を考えていく上で、新しい視座をもつことができました。

前述の授業では、最初に好きな仏像のカードを選びます。その段階で既に、お互いの感じ方の違いが生まれます。次に、グループで複数ある仏像のカードを類分けします。どこに着目したのかお互いの見方の違いがやり取りされました。さらに、全体で類分けの視点の違いを交流することでお互いの**感じ方や見方の異同が共有**されました。最後に仏像に対する自分の見方や感じ方の**変容を交流**しました。授業実践テーマ「**あったかい！」を繋げあった**具体的な場面です。以上のように、本大会の全ての授業は「心の発動」を起こさせる学習対象との距離を考え、「**学びの道程**」としてその距離のあり方（内容）を工夫し、明らかにしようとしました。

共生の学び

同じ時間と空間を共有することで、お互いの感じ方や見方のやり取りは発生します。さらにそうしたやり取りや**自己の変容を実感する場**を意図的かつ自然に構成することで、他と違う自分のアイデンティティーと成長していく自分に喜びを感じ、より“わたし”が創られていく「**共生の学び**」が実現されるのではないでしょうか。

研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」は、上川・旭川、函館における全道造形教育研究大会での実践を通して検証を重ね、札幌へバトンをつないできたものです。これをもとに本大会では20の授業と40の提言で全国へ発信することができました。さらに、授業分科会、提言分科会、扉分科会、そして市民ホールでの全体会を通して参会者の方々とともに深めながら共通化してきた成果と課題を、来るべく「十勝・帯広大会」へとバトンをつないでいきます。

授業実践テーマ

「あったかい！」をつなげ合う造形活動

札幌市造形教育連盟　研究部長　森實　祐里

1 「あったかい！」姿が見られる授業をめざして

めざす子どもの姿から

北海道造形教育連盟の研究主題「“わたし”を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」を具現化するために、札幌市造形教育連盟では、子どもの発達にふさわしい指導・必要な支援を考えて取り組んできました。

はじめに考えたことは、私たちがめざす造形活動を、子どもの姿を通して考えていくことでした。平成19年度、幼稚園から中学校までの実践を行い、思いを膨らませながら、「もっと？したい」という生き生きと活動する子どもの姿が見られました。また、友達の造形活動のよさを感じながら協力して活動する姿や、今までの学習を生かしながら熱中して取り組む姿も見取ることができました。そこで子どもたちがより生き生きと造形活動に取り組んでいくために、子どもの心がふるえるような題材との出会いや、対象・場・他者との対話を支えていく教師の支援の在り方について考えることができました。

授業研究を通すことで共通に見えてきた私たちのめざす子どもの姿から、研究主題を『「あったかい！」をつなげ合う造形活動』と設定しました。

「あったかい！」をつなげ合う姿

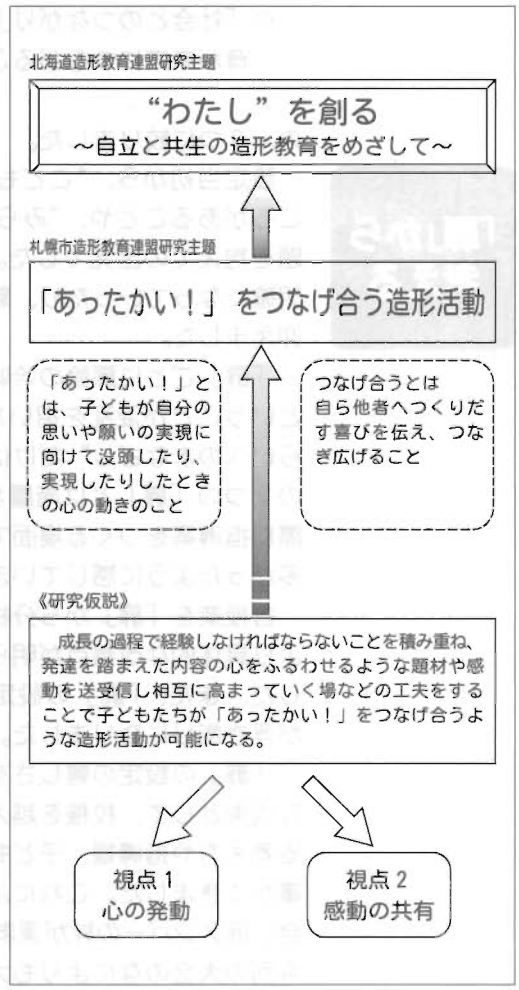
平成20年度の実践からは、わたしたちが大切にしたいことを明確にすることができました。一つ目は子どもたちが造形的な能力を発揮させながら題材に取り組み、仲間と共に造形的な資質を高め合う姿です。もう一つは、一人一人の思いや願いを大切にしながら、他者と感動のキャッチボールを可能とする環境などの設定により、研究主題を子どもの姿で具現化したいと考えました。

平成21年度からは、授業を見る視点を、子どもの「心の発動」と「感動の共有」と設定し、「あったかい！」をつなげ合う造形活動に向けての実践を積み重ねました。

授業づくりの視点

今回の大会では、「扉」ごとに授業を考え、どの校種でも２つの視点から授業づくりを行いました。

わくわくするような材料や題材の投げかけなどを工夫し、子どもの心が動き出す「心の発動」を視点１としました。また、他者と感動し合える場の設定や教師のかかわりを吟味する「感動の共有」を視点２とし、「あったかい！」子どもの姿がたくさん見られる授業を目指してきました。



授業実践テーマ

「あったかい!」をつなげ合う造形活動

2 3つの『扉』

まなざしという考え方

今回の全国大会は、2001年に札幌で開催された全国大会の考え方を踏襲し、校種を越えた「扉」で研究を進めてきました。

扉は、もともと授業改善の視点であり、私たちが議論の中心として話し合いの柱にしてきたものであります。また、これまでの造形教育を振り返り、後世へ伝えていく図工、美術の不易として確認する意味ももたせたいと考えました。そこで、私たちがめざす造形活動に迫るために、授業を通してどのような“まなざし”が必要か考えました。

○子どもの感性を引き出すことができる教材化・題材構成になっているかを子どもの視点から問い直す“こどものまなざしの扉”
○子どもたちの資質や能力をとらえ、育む力を明確にした教師のかかわりを問い直す“教師のまなざしの扉”
○「社会とのつながり」や「授業の広がり」の可能性を視野に、生きる力を育む造形教育が未来につながることを問い直す“みらいへのまなざしの扉”

の、3つに絞りました。

「扉」から考える

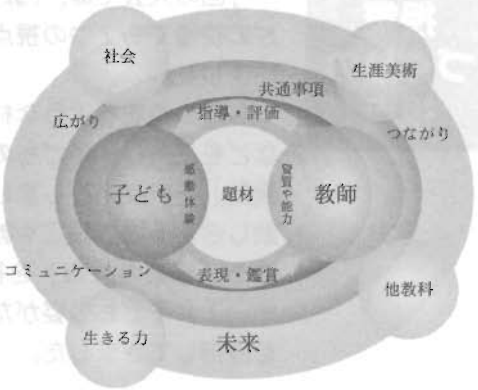
設定当初から、“こどものまなざし”と“教師のまなざし”は表裏一体で、重複するところがあることや、“みらいへのまなざし”は何をみらいと設定するのか難しいなど、問題を抱えての出発でした。ですが、授業づくりを進めていくことで、「扉」での主張すが明確になっていったり、新たな問題点に気付いたりしながら、扉論は何度も再考し大会を迎えました。

「扉」ごとに扉論の吟味を重ねていく中から、この3つの扉はどの授業にも当てはまるということが混乱を招いた要素の一つであることが明らかになってきました。また、“みらいへのまなざし”だけは授業ではなく題材として捉えなくてはならない、と考えると他の2つの「扉」とは階層が違うなど、「扉」ごとの共通点や相違点が見えてきました。実際に指導案をつくる場面では、扉責任者を中心に授業者や司会者が悩み戸惑ったところが多かったように感じています。

各授業を「扉」から分析的にみることで、より具体的な改善点が明らかになっていきました。また、「扉」の設定についても、課題が浮き彫りになりました。

「扉」の設定の難しさを感じる反面、大きな成果として、校種を越えて造形教育に対する考え方や指導観、子ども観などを交流する事ができました。これにより、互いに理解し合い扉メンバーの絆が深まっていったことが、今回の大会のなによりも大きな収穫となりました。

『あったかい！』をつなげ合う扉の構造図



幌西会場

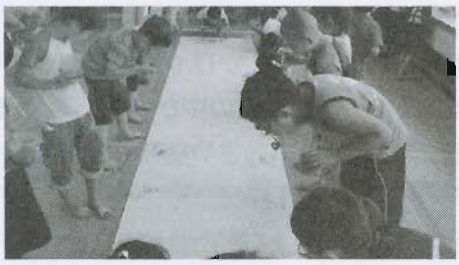
こどものまなざし

題材名 どんどん広がるみんなの色

授業者　中川　治（札幌市立伏見小学校）
助言者　関　建治（北海道：顧問）
榮野元康一（沖　縄：久米島町立比屋定小学校）

成果と課題

□授業会場に色を感じる工夫があった。
□シャボン玉を教材化し、経験が生きるところが子どもの興味を喚起した。
■シャボン玉の色が紙に広がる美しさに感動が今ひとつだった。
■シャボン玉の色を写す子どものやりたいことと違ったのではないか。１年生であればもっと手を使った直接的な活動があったほうがよかった。
■題材構成に、もう一工夫あれば、子どもの活動がシャボン玉からできる形や色に向かっていったのではないか。



助言者からの講評

□造形遊びは見立てに重点がおかれがちであったが、この授業は新しい形の提案であった。図工は子どもの感覚に深くかかわっている。何気なく、当たり前のように見ているところに、培ってきたものが大きい。新指導要領の中で、子どもに寄り添いながら、思い付きを大事にしたい。何を発見し、何に感動したかを改めて見直す必要がある。
□図工は、楽しい教科で夢中になれるもの。自分の表現を認めてくれることが、大きな意欲につながる。感じたことを自由に表現できるような造形遊びは作品づくりではない。造形遊びで大切にしたいことは、材料の価値を教師がどのように認めていくかである。導入時に「形や色に残そう」ではなく、子どもが「形や色が残ったよ」というところに価値がある。

子どもへの手紙から

○授業を見せてくれてありがとう！とっても楽しそうでうらやましかったよ。私もクラスの子たちと一緒にやってみるね。中川先生が「今度、もっといろあそびしよう!!」って、約束してくれたね。どんな形や色になるんだろうね。

○色がついたシャボン玉が画用紙につかまってきれいでした。いろいろな色が重なってにぎやかになりました。ひとつの色もかわいいですが、みんなが飛ばしたシャボン玉が、みんなの色と合わさって仲よしになりました。

授業を終えて授業者から

低学年の子どもたちの「やってみたい」という思いを大切にしたいと考え、シャンボン玉という教材化を試みました。シャボン玉に色を付けることで、色の美しさや重なりを感じて、楽しみながら活動していけるのではないかと考えました。そこで、色水シャボンを5色に限定することで、混色をするためには友達とのかかわりが必要になると考え実践しました。活動の中で子どもたちは「一緒に吹いてみようよ」と交流が自然に生まれていました。しかしながら、シャボン玉を飛ばす行為とシャボン玉の色を紙に写すことが、子どものやりたいことと離れていたのだと感じています。

教材化するにあって、どのような材料（今回は彩液を使用しました）を使うか、場の設定はどのようにするかなど多くの先生とたくさん話し合うことが勉強になりました。

幌西会場

こどものまなざし

題材名

くるくるカラフル

授業者　濱口　裕子（札幌市立緑丘小学校）
助言者　中下　美華（京　都：教育委員会）
藤井　正治（北海道：札幌学院大学）

成果と課題

□色にこだわってつくることや巻くだけではなく伸ばす工夫もできた。また、互いの作品を見合い鑑賞することもでき、形や色の組み合わせを味わった。

□学習のねらいにそって、子どもたちに声をかけることで授業の目標がよりはっきりしていた。

■紙テープの長さ幅、台紙に色など、もっと自由であってもよかったのではないか。そうすることで、より広がった表現になったのではないか。

助言者からの講評

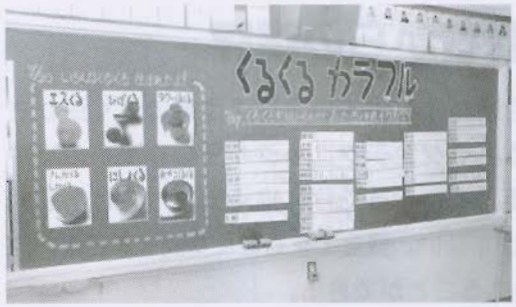
□心の発動を生むためには、思いのままに紙を巻く必要があったのではないか。そこが、この授業のねらいとなり、題材設定に大きくかかわっていく。また、今日の授業で子どもたちの意欲にスイッチがどう入ったのかは、この前時までにいかに作品の中に子どもの思いが入っていったかであると思う。

□教科性が弱いといわれる図画工作。子どもの数だけ答えがあることが、他の教科と決定的に違うが、それを教師が受け止められるかどうかが図工のよさであり難しさでもある。心にスイッチを入れるのは教師の仕事である。授業が始まってからスイッチを入れるのではなく、授業が始まるまでにスイッチが入っているようにしたい。そして子どもの心の高まりが消えることなく活動が連続できるように工夫することが必要となる。

参会者の声から

○お互いのよさをいいながら評価し合うことが大事です。カウンセリングマインド、共感的理解に立った授業づくりを感じました。子どもに語りかける先生の表情がとてもよかったと思います。あったかい気持ちになりました。

○授業を見て感じたことは、教材研究、教材の力、題材理解が重要であることです。そして4年生という発達段階にあったねらいを絞って子どもたちに提示していくことが子どもの力につながっていくことを感じました。



授業を終えて授業者から

「子どもにどんな力をつけたいか」という視点を大切にしながら、「じゃあ、どんな手立てが必要だろう？」と授業づくりを進めていきました。大会まで何度も話し合ったり試したりし、たくさんの方々にご教授いただきました。

大会当日は、何より子どもの笑顔がたくさん見られたことが何よりの宝物です。子どもたちも「緊張したけど楽しかった！」と言っていました。大会を通して子どもたちも私自身も、大きく成長できたのではないかと思います。

分科会でも、多くのことを学ぶことができました。たくさんのご参会ありがとうございました。